

空



2008年

SORA 23号

晴夜 (23) | 3

柴田 佐知子

水提げて夏鶯の山下る

暮れきつて鶺舟の少し浮き上がる

真昼なり蛇を打つ子を遠巻きに

妹に泣かれて渡す捕虫網

噴水の上の青空ふるへをり
死して頸伸びたる鳥や日雷
言ひ訳の通らぬ汗となりにけり
水を出て微熱のつづく浮人形
山奥にその奥ありて胡麻を干す
能面の裏は月夜の山河かな

山

笠

青山悠

山笠^{やま}を組む帝も姫も吊り上げて
海鳴りか地鳴りか山笠の潮井とり
船台に座る漁船みなみ吹く
あぢさゐの路地を曲れば枯野塚
漁神の屋根は小さし夏夕焼
早苗束まづ水神に供へけり
僧兵の駈けし荒磴青しぐれ
外出といふも通院土用あい
秋立つや遠目伏目のほとけたち
赤とんぼ賽の河原を往き来せり



よちよち歩きをはじめた女の子が突然亡くなつて五十年忌を修したとき、僧の読経を聞きながら溢れる涙をおさえることができなかつた。老僧は「五十年経つと、もう立派に向うの世界に行かれたのですよ。お母さんがそんなに泣いてはいけません」とおっしゃつた。

戦後の貧しい食糧事情の中、おいしいものも食べられず逝つてしまった。今年も盆が近づき、あの子が帰ってくる。いそいそと桃や林檎やと供物を買ひ求めている自分にふと気付いた時、とても寂しい。

幼子に小石除けおく盆の道 悠

眞
白
秋
千
晴

魂を預けしやうに螢見る
 壺いつぱい紫陽花まるく納めたり
 飛魚のまだ飛びたさう鱗上げて
 欲ばりて血の色となる蚊の打たる
 梅ちぎる母は猫背を反らしめて
 噴水の音を大きく正午かな
 染まる程青楓見る光明寺
 色あせし買物籠も晩夏かな
 大梨の皮ぞりぞりと実は眞白
 日没の前に満月昇りたる



裏庭に夫がゴーヤを植えた。黄緑色の葉
 が手を広げたように日増しに増えて蔓が
 次々に伸び、どこかつかまりたそうにして
 いる。軒に棒を立てかけてやると、たちま
 ちゴーヤ棚となった。今はその涼しい緑の
 トンネルから二十個程の実が下がり、ぶら
 ぶらと頭に当たる程になった。朝夕楽しみ
 ながら水をやっている。生命力が強く半日
 で随分と大きくなる。ゴツゴツしたイボイ
 ボもたくましい。

沖繩ではゴーヤーと呼ぶ蔓荔枝は秋の季
 語で苦瓜ともいうが、その効能を見ると動
 脈硬化防止・胃潰瘍予防など夫に持つてこ
 いのいいことづくめである。というこで
 夫の休日、健康のために朝からゴーヤに
 始まってゴーヤで終わるのである。

唐辛子

あさなが捷

静謐のまん中に在る百合の花
打ち水を終へて花緒の濃くなりし
殺さうと思ひし恋も花カンナ
雨脚のと切れ菖蒲の浮き上がる
失敗を隠し通して汗を拭く
誰も居ぬ部屋にねむらぬ熱帯魚
寝起きの子泣きてなほさら汗みどろ
泣き顔の通じぬ相手秋の蛇
秋の鳶地球大きく廻したる
怒りなど遠いむかしよ唐辛子

人生最初に花をもらったのは中学三年の夏でした。福岡市郊外の、今はベッドタウンとなっているS町は当時隣町に三菱の炭鉱があり、花をくれたH君はお父さんがそこで働くためにS町に移って来ていたようでした。彼は乱暴な子でクラスに親しい友達もいないようでした。何が原因だったのか、私は生まれて初めて怒って、何か言い返すか手が出たのかもしれない。生徒会役員をするような活発な姉を持つているその反動か、私は何事にも消極的な生徒だった。周りの皆驚いたのですが、一番びっくりしたのは私自身でした。仕返しを心配していたのに昼休み、名前は今も知らない、タンポポに似た黄色味がかった橙色の、花びらがカサカサした花を摘んできて私にくれたのです。それは花壇に咲いていたものなので、今なら嚴重注意ものです。

席替えて彼とはその後は話すこともなく、いつの間にか又引越したらしく、同窓会にも一度も顔を出しません。噂もまったく聞きませんが今でもフツとそのときのことを思い出します。どうしているのか、なつかしい人です。

少年は年をとらない夏の雲

捷

かりがね 小林 朱夏

かりがねや夫より先に逝くもよし
夫に里ありて無花果熟しけり
深海魚となりて沈めり蚊帳の中
新藁を収めて納屋の賑はへり
西国や柿の潰るる石畳
月よりも丸き団子を供へけり
外厨使ふ母郷の天の川
神主のづかづか入る花野かな
沖繩忌いつも小さき島バナナ
杖嫌ふ母の歩みや釣忍



平日の外出での私の足はJ.R. 三十分程で大方の用事が片付く町に着く。この間、変化に富む風景の中を走り楽しい。

発車するとまもなく、玄界灘が車窓に広がる。三つのトンネルがあり、海↓トンネル↓海の繰り返しがおもしろい。次に、田園風景がしばらく続き、やがて右手に怡土富士の裾野が見えてくる。全容が現れるポイントは、あつと言う間に通過するので、読書や居眠りは厳禁である。

「ごきげんよう」と挨拶し、怡土富士を左手に見送る。

吟行に出かけなくても、少しの意欲があれば、私の日常は句材に満ちているのに…。「空」の締切りが迫る度、無欲な自分が恨めしい。

空 作 品 抄

柴田佐知子抽出

茅の輪ぐりて面白きこの世かな

籐椅子に隔離されたる男かな

母逝きし彼の夜も螢けふも螢

夏つばめ山河傷つくばかりにて

立秋の空の青さを厭ひけり

茄子の花意見通らぬ世となれり

正確に春の来てゐる機の音

山笠やまを組む帝も姫も吊り上げて

魂を預けしやうに螢見る

殺さうと思ひし恋も花カンナ

かりがねや夫より先に逝くもよし

団塊の我らの老後若葉寒

満月に声つき入れてほととぎす

吊橋にはじまる秘境朴の花

英単語ぼろぼろ忘れ都草

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

長崎 荒井千佐代

埼玉 服部 早苗

須恵 苑 実 耶

うきは 高倉恵美子

福岡 樋口みのぶ

福岡 青山 悠

粕屋 秋 千 晴

福岡 あさなが捷

糸島 小林 朱夏

福岡 中条さゆり

福岡 吉村 摂護

行橋 安武 晨子

福津 野畑小百合



蜃気楼むかし女帝の御代ありき

卓袱台でこと足りし日や夏の星

放つこと思うてばかり螢籠

春愁や異国のコインもてあまし

薔薇の香や見舞うて励まされてをりぬ

サングラス傷をかくして退院す

梅雨最中物体となり手術受く

鱗雲はらからの老い極まれり

はしたなく見られもしたり浮人形

逝きし子の服着せ立つる案山子かな

滝音の魁夷の画中に入りにつけり

馬小屋にブリキのバケツ風光る

時鳥深山は青き香を放つ

母の日の母につられる国なまり

狛犬に子が嘸ませたる実梅かな

羽曳野 織田高暢

福岡 大地真理

大阪 青木朋子

長崎 鳳 蛭華

横浜 小川 涼

神戸 石川 叔子

福岡 森 紀子

福岡 ふじの 茜

大阪 堀江 恵子

粕屋 長田 憲一

福岡 桜三 奈子

東京 今井 春生

東京 遠山 のり子

萩 岸 千手

福岡 矢野 百合子



帆をおろす日焼けの腕の佳かりけり

もういいの過去を平らに酔芙蓉

潮の色沖より変り漁夫帰る

古民家に息吹き入れし紫木蓮

海見ゆる丘のくぼみのクローバー

ある晴れた日を待ち原爆投下かな

枇杷もいで姉の様子を見にゆけり

夏空に仁王立ちする大樹かな

水田を走るなが虫北京まで

エプロンに西瓜包んで亡母来る

近づけば芍薬と息かよひけり

短夜の屋根を過ぎゆく雨の音

湯上りの抜き襟眩し祭笛

正面に鹿の角据ゑ夏座敷

母のなき故郷となりぬ草の花

福岡 田代貞枝

神奈川 及川木栄子

神奈川 上村和子

東京 荻悠子

東京 山田正子

福岡 犬丸勝子

福岡 山田裕華

鎌倉 永原朱

北九州 每熊美智子

北九州 片田きく

福岡 葉山美香

福岡 川崎よしみ

佐賀 堤堅策

福岡 神谷耕輔

宇美 内藤玲二